主

三年

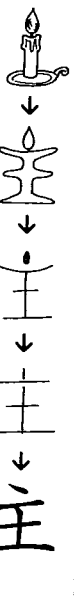
画数 5

筆順 丶 亠 主

オン シュ・ス

クン ぬし・おも

成り立ち



燭台（火をともす台）に火がともっている形をあらわした字です。

むかしは、ともし火はたいそうきちょうでしたから、家の中心において、人びとはそのまわりにあつまりました。それで、この字は、「家の中心」といういみや「まん中にあつまる」といういみにつかわれるようになりました。

「家の中心となる人」を〝主人〟といい、「おもだった人」といいますので、〝おも〟と読まれるようになりました。

また、〝主人〟のことを〝ぬし〟といいますので、この字も〝ぬし〟と読まれるようになりました。

〔シュが漢音であるが、古くはシュウであった。スは呉音である。〕

使い方

▽むかしむかし、古いぬまがありました。ぬまのそこには、ぬまの主がすんでいると、いいつたえられておりました。

▽わたしは、ぼうけん小せつを読むのが大すきです。主人公といっしょになったつもりで、いろいろなぼうけんをするのが、おもしろいのです。

熟語例

▽主人公（ものがたりなどの中心になる人。「『三じゅうし』の主人公ダルタニヤンは、フランスのいなかガスコーニュから、パリに、じゅうしになるために、やってきました」などというふうに、つかいます。）

▽主婦（一家の主人のつま。家事をとりしきる人。「おかあさんは、しょくぎょうのらんに主婦と書いていました」など）

▽主要（主だって、重要なこと。「この文の主要なかしょに赤いしるしをつける」など）

▽坊主（坊さん。そうりょ。また、坊さんのように、頭の毛がないもののことを、いうこともあります。男の子なども、坊主とよぶことがあります。）

守

三年

画数 6

筆順 丶 宀 宀 守 守

オン シュ・ス

クン まも＝る・も＝り

成り立ち

手首のみやくどころをしめし、ものごとの〝きまり〟のいみをあらわした〝寸〟と、家の形をあらわし、家のいみをあらわした〝宀〟とを組み合わせて作った字です。

「家のきまり」をあらわした字で、これはぜひとも守らなければならないものなので、〝まもる〟といういみにつかわれます。

むかしは、「家のきまり」を〝家憲〟と言って、これがだいじに守られている家はさかえ、これが守られない家はほろびました。

使い方

▽道路を歩くときは、規則を守って、右側を歩くようにすると、交通事故にあわずにすみます。

▽むかしは、貧しい娘が、子守にやとわれて、つらい思いをしたなどということがありました。「五木の子守唄」などは、子守娘の心を歌ったものです。

熟語例

▽守備（敵の攻撃から守り備えること。守り。「守備にまわるより、攻撃をかける方が有利です。攻撃は最大の防御なりということばもあります」などというふうに、つかいます。）

▽守勢（敵の攻撃を守る態勢。守りの態勢。「守勢にまわると、あんがいもろい」などと、つかいます。）

▽守銭奴（一銭でも失うまいとあくせくする、けちな人のことを、ののしっていうことば。「あいつは守銭奴だから、寄付なんかしてくれないよ」などというふうに、つかいます。）

▽留守（もともとは、ほかの人が外出している時、家を守ることを言いました。今では、外出して、人が家に居ないことを言います。）